

りたり、主悦びて迎へ入れたり、住居のいとわびたるもをかしく思ひたるに、窓の外面に人の音
まけり、みればあるじ燈に竹竿もちそへて、袖の樹の下にゆき、竿もて袖を一つばかり打落して
袖にして入りぬ、うち見るより是を一種の調菜にしぬるなり、いとをかしきわざかなと思ふに、
さればぞ袖味噌にして出しけり、酒一獻すぎて、大阪より到來しつるとて、いと美しき餅をいだ
しぬ、宗易さらばよべより知らずる者ありて、かくはと、のへけむ、初めのわびたるさまは皆作
りもの也と興さめて、その會未半ならざるに、京に用事ありとて急ぎ歸りけり、あるじと、むれ
どもきかざりしとぞ、今の茶は皆作り物なれば、宗易の心おもしろくかたらふ友は、いまの茶を
なす人には少なくやあらん、是も三齋翁のかたられしに、むかし宗無といふわび人の茶に、宗易
ら客にゆきけり、あるじいでて、唯今名水到來候とて、釜を引上げて、勝手へいりけり、其内に宗易
棚より炭とりおろして、すみをさしくべけり、あるじぬれがまをもち出て、暫く炭をみて釜をか
け、り、予も此席に在けるが、是程おもしろかりつるはなかりしといひ給ひけるとなむ、主客の
意の合したる事など、これらをもも知るべし、名水を待ちうくるに、常度にか、はらざりしぞ、
實に活動ある所作にて、これらをもも其、實意よりいでて、わが物になりしは、みな臨機應變か
くはありけるてふ事を知るべきなり、

〔茶窓閒話上〕京師眞如堂の僧に東陽坊といふあり、茶道を好みて利休の弟子となり、尤侘數奇
の名譽ありけり、掛物には尊圓親王の六字名號を、利休の好みにて紙表具にしたる一幅、伊勢天
目一ツにて、一世の間爐を絶さざりし、或時秀次公の近臣を請じ茶湯せしが、薄茶をたて、さて
各には暇なき方々に候へば、薄茶に手間とらず、大服にたて、進すべきほどに、吸茶になされ候
へとたて出しけり、此作意時に應じてよろしきと、休師も稱美せられ、世人もはめて、其頃は薄茶
をも吸茶にせし事はやり、彼が名をかりて、大服に點るを東陽に仕るなどいひし、